

渋谷の商業施設

渋谷には人々を呼び寄せる魅力的な商業施設が今も昔も多く存在する。2023年11月に竣工、以降順次開業中のShibuya Sakura Stageも話題だ。日々更新されていく、渋谷のアイコンとも言える有名な商業施設に関する本を紹介する。

『SHIBUYA109式Z世代マーケティング』

長田 麻衣／著 プレジデント社 2023



長きにわたり若者の流行の発信地として愛され続けているSHIBUYA109。社内のマーケティング部門であるSHIBUYA109 lab.がZ世代の流行を調査し、分析したマーケティングの本。

『東京人 2024年1月増刊』

東京人編集室／編 都市出版 2024



現在開発が進んでいる渋谷桜丘一帯についての特集号。ゆかりのある人々のインタビューや周辺のスポットを掲載。開発のいきさつや完成予想図もあり、読み応え十分。

『代官山コールドケース』

佐々木 譲／著 文藝春秋 2013



川崎で起こった殺人事件と17年前に代官山で起こった殺人事件の関連を追うサスペンス。代官山ヒルサイドテラス、代官山アドレスが登場する。

「渋谷読書人」は

渋谷に関わる人全てに向け、おすすめ本の情報を発信していく、渋谷区立図書館が発行する定期刊行物です。

渋谷読書人 2024年4月・5月号

発行 / 編集 渋谷区立図書館

株式会社図書館流通センター

発行日 2024年4月

渋谷区立中央図書館

電話 3403-2591

住所 渋谷区神宮前1-4-1



図書館いろいろ

4月30日は図書館記念日 5月は図書館振興の月

気になる新着コーナー

☆図書館を舞台に

『書架の探偵』

ジーン・ウルフ／著 酒井 昭伸／訳
早川書房 2017



人口が激減した近未来において、図書館は前世の作家や詩人の複生体(リクローン)を蔵者として所蔵している。そのうちの一体である主人公のもとに女性が訪れ、ある謎を解くため力になってほしいと依頼される。貸し出された彼は謎を解くべく尽力するが…。

『図書館戦争』

有川 浩／著
KADOKAWA(角川文庫) 2011



「図書館の自由に関する宣言」著者が地元図書館に掲げられたそのプレートから着想を得たシリーズ全6巻の1巻目。合法化された検閲を行うメディア良化委員会。唯一それに対抗しうる公共図書館が大きく姿を変えた図書隊。激化する一方の両者の抗争はどうなっていくのか。図書隊員たちの恋の行方も気になるところ。

『刑務所図書館の人びと』

アヴィ・スタインバーグ／著 金原 瑞人／訳 野沢 佳織／訳
柏書房 2011



アメリカの刑務所図書館で司書として働くことになった男性の実話。様々な罪で収監された囚人はどの人も強烈な個性の持ち主。彼らとの交流は刺激あり、心温まるものあり…。

☆図書館を身近に

『図書館は生きている』

パク キスク／著 柳 美佐／訳
原書房 2023



長年、アメリカで司書を務めた著者が語る、図書館の愛しい日常と、世界の図書館をめぐる25のエピソード。図書館の在り方について考えさせられる。あなたの旅行計画に加えるべき図書館なども紹介されている。

『図書館が教えてくれた発想法』

高田 高史／著
柏書房 2007



図書館で働き始めた女性が図書館の仕組みについて学んでいくという設定のストーリー。本の分類の規則という初歩的な内容から、上手な図書館の利用法まで、図書館のことが体系的に学べる本。

『図書館ウォーカー』

オラシオ／著
日外アソシエーツ 2023



公共図書館員として勤務経験のある著者が、「陸奥新報」連載中のエッセイ「図書館ウォーカー」から66編を選び加筆、写真を加えて単行本化。旅のついでに訪ねた図書館の特色とあわせて、近隣の風景、施設、グルメも紹介。あなたも旅先で図書館に立ち寄ってみませんか。

『世界一かんたんな図書館の使い方』

つのだ 由美こ／著
秀和システム 2024



図書館にはいろいろな活用方法がある。フリーランスで大学図書館の司書を請け負う著者が、図書館の使い方やさまざまな情報の検索術を紹介する。読書が苦手だという著者の教えてくれる方法はかんたん。読書を嫌いだと感じている人でも読みやすい本の探し方や読む速度が遅い人におすすめの読み方なども紹介している。

『いのちのめがね』

灰谷 孝／著
PHP研究所 2024



目は飛び出した脳といわれるほど重要な器官のひとつ。身体の不調は目からきている可能性もあり、見え方を調整すると体調が整うこともある。いくつかの事例や体験談なども紹介している。

『山口恵以子のめしのせ食堂』

山口 恵以子／小説 長船 クニヒコ／めしのせ案内
小学館 2024



東京の片隅に夜だけ営業する「めしのせ食堂」がある。アツアツのご飯と味噌汁とご飯のおともを目当てに、心とお腹を満たそうとさまざまなお客さんが訪れる。小説に登場するご飯のおともは実在し、取り寄せも含めて紹介している。